

## その研究(技術)はどんな問題を解決できますか？

北村 實彬

NPO法人近畿アグリハイテク



考える女性が運営する農産物直売所、農家レストラン、農家民宿は成功すると言われます。それは、自分が家族に食べさせたいと思うもの、あったらいいと思うもの、毎日の生活の中で欲しいと思うもの、そうした日々の暮らしの中から発想するから、お客の気持ちにフィットするのでしょう。「いやだな、と思ったらそこにビジネスチャンスがある」と言われます。これらに共通しているのは、生活者の視点、課題解決の視点です。

農林水産研究基本計画の基本的考え方は、「わが国の農林水産業・農山漁村が直面する状況や国際的な課題の克服にむけて」「持てる機能を最大限に活用するため」「産学官の各部門が共通の方針の下に新たな知識体系を構築し」「新たな農林水産政策に即して」研究開発を進める、ことにあるとしています。農水省の競争的資金制度の応募要領に「農林水産研究基本計画に即して」という文言があるのはそうした背景があるからだと思います。つまり、農水省の試験研究は、課題解決というコンセプトを起点として構築されていると言えます。それほど、解決を迫られる課題が多い、とも言えますが、これまでの「技術ありき」のやり方に慣れた方には、結構“高い壁”と映るかも知れません。しかし、「良い商品を開発したから、これは売れるはずだ」という発想には限界があると言われるように、「技術ありき＝シーズ・プッシュ型」技術開発では限界があることが、産業構造審議会の小委員会でも報告されています。

競争的資金への応募書類のブラッシュアップ依頼にお見えになる方には、いつも次の質問をさせていただいています。「あなたのシーズで解決しようとしている問題は何ですか」「その問題を解決するためにどこを攻めたらよいとお考えですか」「そのために、どのような戦力を用意しておられますか」「期間内にどこまで到達できるとお考えですか」。こうした議論を経て、一つでも二つでも、現場での課題解決に寄与するシーズを拾い上げることが、農林水産省におけるコーディネーターの役目だと思っています。

農業は多くの個別技術の統合によって成り立っている総合システムと言われます。一方で、人間の能力の問題や、大量の知識を限られた年月で教えるという教育上の効率性の問題から、近代社会においては「分野」という“壁”が形成されています。専門性と言い換えても良いかもしれませんが、分野の壁を乗り越える柔軟性があればよいのですが、これはしばしば“囲い込み型”の発想を生み出してしまいます。しかし、現代社会では同時に、広大なインターネットのクラウドの中にある必要な情報に簡単にアクセスすることができます。ステイーブ・ジョブスの言葉の中に「創造性とは、ものごとを結びつけることにすぎない。今、目の前にあるものと、過去の経験や知識が結びつく中で新しいものが誕生する」というのがあります。多くのことを経験し、そのことについてよく考え、つなぎ合わせる点をたくさん持つようにすることで、この“分野”という壁は乗り越えられるように思います。深い専門性と共に、柔軟な視点を多くもったジェネラリストであることが、農林水産省におけるコーディネーターにとって必要な資質であると自問しながら、活動を続けています。

氏名：北村 實彬（きたむら ちかよし）

専門分野：先端科学、一次産業、三次産業

所属・役職：NPO法人近畿アグリハイテク 理事・事務局長

略歴：京都大学大学院農芸化学専攻修了(1973年)後、京都大学農薬研究施設助手(～1981年)。その後、九州農試(～1987年)、北海道農試(～1991年)で害虫管理の研究に従事。農業生物資源研究所で、イネゲノム研究チームの立ち上げ、DNAバンク設立に従事(～1994年)。3年間農林水産技術会議事務局勤務(研究開発官、～1997)の後、農業研究センター研究情報部長(～1999年)を経て、蚕糸・昆虫農業技術研究所企画連絡室長、農業生物資源研究所企画室長、企画調整部長、理事を歴任。2005年退職後、農林水産先端技術研究所研究第2部長(～2006年)、群馬県立日本絹の里プロデューサーを経て、2008年現職に。2010年4月から、農林水産省産学官連携事業コーディネーターを兼任。

メッセージ：

農業には工業・製造業とは異なる点がいくつかあります。その一つとして、農業経営には、多様な知識が必要であり、「分野」に拘らない幅広い視点が必要だと思います。これまで、様々な地域で、さまざまな「分野」に携わった経験から、異分野の視点やモノの見かたに対する理解、問題の本質を複数の視点で立体的に理解する能力、課題解決の視点、とりわけ、生活者の視点が重要だと考えています。